

東日本大震災で限界を知り，限界を超える支援活動を目指して

Know the Limits by the Great East Japan Earthquake, Aims to Support Activities Beyond the Limits

阿部 定好

Abe Sadayoshi

1 はじめに

2011年3月11日14時46分に，わが国の観測史上最大となるマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が三陸沖で発生した。約1時間後に津波が東京電力（株）福島第一原子力発電所（東電福島第一原発）に襲撃し，電源設備が水没し，13日間冷却設備は，給電が途絶えた。その結果，東電福島第一原発は，水素爆発事故が発生し，放射性物質を放散した。富岡町民は，全町内が警戒区域に指定され，避難した。

政府は，7月19日に東電福島第一原発で循環注水冷却の確保によって，放射線量に着実な減少傾向が確認されたとしてステップ1の終結を宣言した。次いで，放射線量を大幅に抑えるステップ2へ移行した。

私は，日本技術士会防災支援委員会の大元守委員長の紹介で，5月に富岡町役場も避難した「ビッグパレットふくしま」を訪れ，メガネが曇る湿気とダンボールで辛うじてプライバシーが保たれている状況を知り，言い知れぬ無念さを感じた。何時でも，どのようなことでも，被災者のためになる支援があれば連絡頂けるようお願いした。8月初旬には，富岡町の震災復興支援の相談を頂いた。

2 富岡町震災復興ビジョン策定委員会発足

放射線の健康影響の規制根拠は，ICRP（国際放射線防護委員会）勧告である。勧告は，①広島と長崎の原爆被爆者には100 mSv/年以下の低被ばく線量とガンの発生率との統計的因果関係はない。②被爆者の子孫に有害な遺伝的影響は認められていないなどの事実に基づいている。

富岡町民は，放射線の健康影響についての知識

を持つ機会が少なかったために，放射線とどう向き合ったら良いか分からず困っていた。

私は，震災復興支援の相談に対して，富岡町民に科学的根拠に沿った説明ができる技術士を委員会に委員と同席させ，分かりやすく解説し，委員の理解を助ける役割を提案した。また，講演テーマと講演者の人選の相談には，現実的なりリスク認識に基づくビジョン策定を祈念して，放射線の基礎，除染，放射性廃棄物の法体系，及びリスク評価の4テーマを提案し，講師を推薦した。

富岡町は，2011年8月26日に，震災復興ビジョン策定委員会を発足させた。委員構成は，富岡町役場からの推薦者と自己推薦の公募による企業，農業，漁業，商業，観光，役場，教育，建築士，区長会などの多様な富岡町民代表20名と，役場職員6名の26名であった。（写真1）



写真1 グループ討議の様相

3 審議

富岡町役場の事務局は，委員会の発足の冒頭で，「国や県にただ従うだけではなく，委員の意に沿わないことがあれば発言をいただき，町独自の考えとしたい。県や国に対しても必要があれば働きかける」との富岡町独自の震災復興ビジョン策定への決意を述べた。

講演は，第1回目の委員会で大場恭子 現東京工業大特任准教授が「震災復興検討にあたり必要

な放射線の基礎知識」, 第2回目で井上正 現電力中央研究所研究顧問が「放射能除染の必要性和課題」を, それぞれ講演した。大場恭子准教授は, 「母親として年間20 mSvの土地に住む気があるのか」と委員から問われ, 「個人的な気持ちとして引っ越してきててもよい」と述べた。避難者と共に放射線に向き合う姿勢は, 好感がもたれ, 再要請され「ベラルーシ・ウクライナ福島調査団に参加して」を講演した。

私は, 警戒区域内の富岡町の現場調査で, 委員に, 放射線の基礎及び除染の講演で学んだ知識に基づき自身が気掛かりな場所を伺い, 放射線測定を支援した。委員は, 測定事実から事故由来のホットスポットなどについて, 簡単な説明ができるまでに放射線の基礎知識を身に付けた(写真2)。委員の基礎的理解が深まった結果, 汚染分布の把握, 廃棄物の発生を抑える除染方法など現実的な課題等について意見交換が行えた。震災による家屋の損傷及び津波浸水域を確認した知見から, 沿岸を道路などで多重に防護する防潮堤と中間貯蔵機能についても意見交換が行えた。このように私は, 震災復興ビジョンの課題を学び, 各委員との共通認識を得ることができた。



写真2 富岡町(警戒区域)線量率測定実習

審議は, 2011年8月から6カ月間に7回の委員会と4回の作業部会で行われた。作業部会は, 3テーマ(医療・教育福祉, 防災, 産業)毎に, 委員の思いを引き出すファシリテータと, 技術士が加わった。私は, 原子力・放射線部門の技術士として, 放射線によるガンの発生, 放射性物質の経口摂取など素朴な疑問に対して, 委員の理解度に応じた解説に心がけた。委員からは, 桜に代表される故郷への強い思いを教えて頂き, 審議の支援ができた。

審議結果は, 放射線の健康影響への不安から帰町を躊躇していた委員も, 2012年1月30日に「全町民が一緒になって富岡町に帰ること」を目指す震災復興ビジョンに賛同し, 三瓶一義委員長の下でまとまった。

次いで, 田中司郎副町長を議長とする町役場の課長級の実務者による震災復興計画策定委員会に引継がれた。

私は, ①ビジョン策定委員会で桜を伐採するならば帰町はできないとの思いを汲み取る。②莫大な費用と期間が掛かることから, 富岡町民に進捗が分かるように, 区域を集中し, 段階的な震災復興計画にするなどについて発言した。

策定された震災復興計画は, 富岡町民の意識調査を経て, 富岡町内の低線量区域, いわき市, 郡山市にそれぞれサテライトを持つ計画で, さくら富岡, つつじ富岡, せきれい富岡と名付けられた。期間は, 復旧期:2012年~, 復興期:2017年~, 発展期:2021年~である。

4 むすび

委員は, 放射線の基礎の講演, 個別解説, 現場測定等を通じて, 生活の随所に放射線は存在し, ゼロとはならないことを理解した。更に, 持続可能な発展を次世代に引き継ぐために, 現実的な放射線の健康影響とリスクの共通認識に基づく, 除染に要する適正な経済的対応などへの議論が深まることを期待する。

技術士は, 専門家として科学的に妥当で実現可能な対応が求められる。私は, 東日本大震災の津波による人知限界(爆発)を知り, リスクの共通認識の形成等を通じて限界を超え, 次世代へエネルギーの選択肢として原子力が引き継ぎえる支援を目指す。また, 富岡町の震災復興計画の実現を見届ける。

阿部 定好 (あべ さだよし)
技術士(原子力・放射線部門)

日本原子力研究開発機構
核燃料サイクル工学研究所
e-mail: abe.sadayoshi@gmail.com

